

# 郷土文学資料センター だより

第11号 2008年5月26日

## 資料センターの発足のころ

武市 真弘

(郷土文学資料センター 元研究員)

最初に、私事 今年三月末日を以て定年退職となりました。これまでのご厚誼に心より御礼申し上げます。今回、本紙に拙文を掲載して頂ける由、滑り出しの頃のことを少々書いてみます。

仁保の嘉村家に礎多の蔵書を見に行ったのは何年前だったか思い出せない。秋口だったような気もするが確信はない。一緒に行つた学生の一人が「狐のしっぽ」と言って道端の草を探り「子どもの頃お尻に付けて遊んだ」と言ったから、そういう体験のある人ならこの言葉をヒントに季節が解るかもしれない。ともかく晴れた日の嘉村家の座敷で学生数名と茶菓の置かれたテーブルを囲んで初対面の和田健先生から種々のお話を伺った。福田百合子先生・安光裕子さんも一緒だったはずで、資料センターへの資料収集第一段階となる嘉村家からの寄贈に立ち会い、その労を執られたのがあの日の和田健先生だったというように認識している。

センターの資料収集に「購入」はあり得なかった。寄贈・寄託が原則で、どうしても紹介者・仲介者そして保管先への信頼に負うところが大きい。センター開設に色を添えたのがほかならぬ礎多資料であったことは開設当時の記事や写真に徴して明らかである。幸運なことにその後も、協議会委員或いは評議員の先生方のお力に与り、貴重な寄贈資料が増えていったのである。

資料は眠らせておいては、折角の寄贈者に対して失礼なだけでなく、資料そのものに対して失礼であろう。資料の利用のためのルールが必要である。センター開設にあたり、突然その作業を命じられた。この任務一資料センターの規程作成一では安光さんに感謝しなければならない。

あの頃ワープロが普及し始めていた。夏休みに入った頃だったか講習会が本館の教室で開かれるので一緒に受講しませんかと安光さんに誘われた。講師は何と卒業したばかりの教え子で「カーソルをここへ動かして・・・」と、シャープ「書院」の文書作成を教授され、そこそこ習得した。このことの意義は大きい。一夏かかって県内外の図書館・文書館・博物館・文学館から取り寄せた諸規程を参考に（国立国会図書館の規程集が一番参考になったように記憶している）規程作りを終えた。規程集には「様式第1 寄託申込書」といった書式が付随する。これにはご案内のように罫線が多く、手書きの書式では恰好が悪い。当時、演習の資料などを学生はガリをきる、教員はテスト問題など手書きしたものを作成するというのが普通だった。部数の多い大学案内やパンフレットなどとなると印刷所に外注する。この規程集に外注などはありえない。ワープロによる印字がものをいった。安光さんのお陰である。

最後に、郷土の人々の文学に託す夢のため、資料センターの更なる展開を期待致します。

# 武市眞弘先生との思い出—長いようで短かった二十余年の歳月—

## 野口 義廣

(当センター研究員)

一昨年の熊本先生に続き、当センターの一翼を担ってこられた武市先生がとうとう定年で大学を去られた。一つの時代の終わりである。実に寂しい限りだ。研究室退去のお手伝いをしながら、これまで御一緒した歳月が学生の思い出とも重なって来ました。次はいよいよ自分の番であるが、近年故障続きでショッちゅう体調を崩している私には、これまでの方々のように定年までの日々を全う出来そうな自信はない。武市先生はあれやこれやと言ひながらも、最後まで全うされたのは見事である。専攻が同じ国語学（日本語学）ということで他の方々よりも仲良くさせていただいた。

忘れられない思い出は文学部の国文学科時代、前期の試験休みに恒例となっていた万葉旅行に関するもの。その時のテーマは「九州万葉と大内氏ゆかりの地を訪ねて」。佐賀で学会があり、それに出席していた先生と私は博多駅で学生十数名と落ち合った。最初の訪問地に筥崎宮を選んだのはその日が十月十日だったからである。室町時代の天文六年（1537）十月十日、当時筑前の守護であった大内義隆が一族郎党を率いて筥崎宮で法樂和歌を催した時の懐紙が現存。月日の符合に不思議な縁（縁い）を覚え、事前に社務所に連絡。訪問の趣旨を説明し現物を見せていただく手はずを整えた。しかしながら、それが複製だったことは二人にとってまことに苦い思い出である（「神明に仕えるとは一裏切りに満ちた“儀式”」『防長学報』No. 6 / 1999.4）。

もう一つ忘れられないのは今回の片付けでなつかしくも登場した古代史関係の著作である。先生の専攻が上代語でご出身が皇典講究所に始まる国学院大学とあれば当然と思われるかもしれないが、通常の古代史関係のものではなく昭和56年（1981）の小生赴任以来、心ある誰かに説いていた古田武彦氏の九州王朝説に関するものであった。しばらくして先生、安光さんと三人で講読会を始めたが長く続かなかった。結論を先に言えば、古田説は二人の受け入れるところではならなかったのだ。一方小生は古田氏の仕事の何たるかまた研究史上における意義を、古田氏との出会いを通してさらに出会った中小路駿逸先生のお仕事により二人の業績の何たるかをはっきりと見て取った。その頃はまだ次のような言葉では表現出来なかつたが、「二十世紀末日本の人文科学界に起きたパラダイム・シフト」についての学界で初めての指摘・宣言であった。

先生の知友には当然のことながら古代学関係者がたくさんいた。中でも忘れないのは、当時文部省の教科書調査官をしていた嵐義人氏（日本史・古代担当）との出会いである。東京での学会の折に引き合わせて下さったのだが、氏もとうとう降参しなかつた。一方、小生にも九大大学院時代同期だった白石良夫（国語）、さらには隣の国史研究室で助手を務めていた森茂暁（日本史）の両調査官がいる。彼らにも大いに関わりのあるところであるが、そのいずれからもそれなりの回答は得られていない。そのような思い出のつまつた古田氏の古代史関係の著作ではあったが、武市先生の退官の年が『源氏物語』の一千年紀に当たろうとは想ってもみないことであつた。しかしながら、私がこれまで説いてき、また研究してきた事柄がけっして荒唐無稽なものではなかつたことを確信している。それらは厳密というよりもごく当たり前の学問研究の基本的な操作を通して得られたものである。そしてそれらがはからずも『源氏物語』を始めとする王朝の物語研究の裾野をも浸食し始めたことを。否それは王朝の物語研究だけでなく、他のたとえば『万葉集』研究と例外ではないことを。それらはいずれも武市先生ほかとのバトルを通して得られたものであった。

# 武市眞弘先生と郷土文学資料センター

—右手人差し指と細目調査カードと水遊び—

安光 裕子

(当センター研究員)

この3月に定年退職された「武市先生と郷土文学資料センター」の想い出といえば、何と言つても『センターだより』の編集と資料調査です。

『センターだより』は本誌で11号を迎えます。創刊号から10号までを武市先生がお一人で編集されたことには頭が下がります。右手人差し指一本でパソコンのキーボードを縦横無尽にたたかれる妙技は、わたくしどもが両手で入力してもかなわないくらい、華麗に美しいものであります。

当センターの設立から20余年の間、三隅町公民館所蔵の清風文庫（下関市）、萩市立萩図書館、忌宮神社（下関市）や阿川八幡宮（下関市）などの調査を行いました。どの調査にも参加したのは、熊本守雄前所長のほかは、武市先生とわたくしくらいでしょうか。熊本先生のご指導の下、ただひたすら細目調査カードをとり続けました。「(1) 外題（簽・直）（原・後）（左・中・他）」「(2) 所蔵者」「(3) 整理番号」「(4) 卷・軸・帖・冊」「(5) 残欠・保存状況」「(6) 書写時代など」「(7) 編・筆者」「(8) 寸法（表紙）」等々。資料調査に参加して、貴重な資料に触れるという喜びを味わえたことは言うまでもありませんが、調査の合間の「おまけ」が懐かしく想い出されます。

平成2（1990）年7月17日・18日の1泊2日、車3台（熊本車、清原車、安光車）を連ねて伊藤忠芳氏（当センター協力員）の阿川八幡宮の調査に行ったときのことです。いつものように黙々とカードに採録、その合間には近くの阿川海水浴場に出かけ、水遊び。武市先生の眼鏡が海底に沈み、みんなで探す、そんな一幕もありました。今ではどれもこれもわたくしの美しい想い出となっています。

ここ数年来、学生と教員とともに資料調査にでかける機会がないのは、当センターの設立から関わってきた者として、一抹の寂しさを覚えます。文化創造学科が新設された今、日本文化系の学生と一緒に資料調査に出かけ、その醍醐味を味わう、その日がそう遠くないことを期待しています。

【写真】阿川海水浴場で水遊び



## 「ふるさと山口文学ギャラリー」の開設

林 史 子

(山口県立山口図書館資料情報課)

平成 20 年 4 月 22 日、山口県立山口図書館内に「ふるさと山口文学ギャラリー」が開設された。このギャラリーは、「国民文化祭 2006」の関連事業として開催した「ふるさとの文学者 13 人展」が、山口の文学をアピールして好評を得たことをさらに継続・発展させ、図書館の所蔵する山口県の文学関連資料を、広く紹介することを目的に開設したものである。

県立図書館は、明治 36 年の開館以来、郷土関係資料の収集に努めており、現在郷土資料のうちの文学関連資料は 1 万冊を数える。図書館が所蔵するこれらの資料を、時代やジャンルなど様々なテーマによって紹介するための施設として、また、山口の文化発信の場として、多くの方々に親しんでもらえるよう、工夫をこらしたスペースづくりを心がけた。ギャラリー内には、展示室 2 部屋と、約 7000 冊収納可能な書庫、ビデオや DVD 鑑賞用のブース、閲覧席 4 席、資料検索のためのコンピュータ 1 台が備えられている。展示室では、これから年数回の企画展と、ふるさとの文学者に関する資料を展示する常設展を予定している。

オープン初日は、関係者の方々のご臨席のもとセレモニーを催し、下関市在住の作家・古川薰氏の記念講演会を開催した。また、6 月 29 日まで企画展として、県出身の芥川賞・直木賞受賞作家（斯波四郎、高樹のぶ子、古川薰、伊集院静、船戸与一）関係資料による、「芥川賞・直木賞受賞作家展～山口県出身の作家たち」を開催している。この企画展には、県立大学附属郷土文学資料センター所蔵の古川、高樹両氏の自筆原稿 4 点を借用し展示しているが、作品が生まれるまでの創作過程を身近に感じることができると、好評である。

今後は、図書館という誰もが気軽に立ち寄れる空間で、ふるさとが育んだ文学の世界を楽しんでもらえるよう、県立大学附属郷土文学資料センターをはじめ、各地の文学館や関連団体と連携しながら運営に努めたいと考えている。



### 《平成 20 年度企画展予定》

文学のなかのふるさと山口

7 月 1 日～10 月 30 日

防長の女流文学 歌人・俳人篇

11 月 1 日～1 月 29 日

維新のふるさと 吉田松陰没後 150 年記念

1 月 31 日～4 月 29 日

# 鶯流狂言特別公演を終えて

米本 太郎

(本学大学院修士課程修了生・山口鶯流狂言保存会会員)

今年3月20日に「鶯流狂言特別公演 山口県立大学と鶯流狂言～石川弥一から50年～春の日舞台」が県立大学講堂で開催され、600人近い方が会場に足を運んで下さいました。その裏側には様々な方の協力があり、その結果がこのような形になったのだと思います。

今回の企画は、山口女子短大（現山口県立大学）教授（故）石川弥一先生が『山口に残存する鶯流狂言』を出版されてから50年になるということから始まったのですが、石川先生のお人柄についてはほとんどわかつていませんでした。そこでいろいろな方に会いに行き、石川先生について聞くことにしました。

まず初めに中原中也記念館館長福田百合子先生にお会いしました。仕舞を習ったことや、ご子息の話などを聞くことができました。それから萩女子短期大学（現山口福祉文化大学）の鳴瀬信子氏にもお会いし、一緒に仕事をされた事や、事故に遭われたときの話をしてくれました。このお二方にはこの他にも石川先生の気さくな人柄や、普段のことなどをいろいろと伺うことができました。



そして、どうしてもお会いしたかった津田洋子氏にもお話を聞くことができました。津田氏は石川先生とともに『山口に残存する鶯流狂言』の編纂に尽力された鶯流狂言の無形文化財技術保持者中西治郎氏のご息女です。石川先生が新潟から来られ、風前の灯だった山口鶯流狂言の保存に努められ、中西氏とともに保存会を結成させたことなどのお話を伺うことができました。その他にも時間がある限りいろいろな人にお話を聞いて回りました。どの方に伺っても、初めに石川先生の人柄の良さを言われました。

記録としてでなく、皆様の心に残っている石川先生に出会うことができました。そして、今回の公演には山口県立大学同窓会桜園会の方々のお声かけがあり、多くの人が石川先生に会いに会場に来てくださったのだなと感じました。

## 寄贈資料 - 2007年11月～2008年4月 -

### 寄贈図書

池田美成他編集『山口県の日本一物語』((山口県)、1968年)・山本一成『目で見る大内文化』(大内文化研究会、1997年)・内田伸編集『中原中也写真集』(山口市観光協会、1994年)

三坂圭治『山口県の歴史』(山川出版社、1971年)・太田静一『中原中也の詩と生活』(鳥影社、1995年)・佐々木幹郎『中原中也』(ちくま学芸文庫、1994年)・大岡昇平『中原中也詩集』(岩波文庫、1997年) (以上、佐野千鶴子様より寄贈。)

青潮短歌会『六弁花』((山口県)、1989年)・青木末治『真実の道をもとめて』((山口県)、1981年)・青木末治『いのちめぐまれて』((山口県)、1992年)・油谷町郷土文化会『油谷町の昔話第一集』(油谷町郷土文化会、1976年)・阿部三雄『阿部哲子遺詠集 思い出草』((山口県)、2000年)・伊藤駿治『神道微言』(阿川八幡宮社務所、1995年)・伊藤延一『四国へんろ記』(古川書房、1981年)・井上青穂『句集「虹の裏」』((山口県)、1971年)・上田正道『上田正道遺歌集』(北長門地方文化研究所、1978年)・衛藤和行『追悼文集後ろ姿』((山口県)、2002年)・江原青鳥『歌集山鳥』(ねばたま短歌会、1973年)・大井政雄『幻影の古都』(条例出版、1979年)・大井政雄『まことの花』(山口県、1985年)・大

森美光『合本せんゆう』((山口県)、1995年)・大森美光『青い蛙』(諦念庵、1994年)・大森美光『戦友春秋』(第二中隊誌刊行会、1984年)・岡本覚次郎『風雲八十年』(山口県、1974年)・河内美舟『手つなぎの詩』(ぎじろくセンター、1989年)木本糺・他『新しいなか教師』(赤間閣書房、1978年)木本芳子『自由詩』((山口県)、2004年)木本芳子『木本芳子作品集』((山口県)、2004年)・木本芳子『歌集あしあと第一集』((山口県)、2004年)・木本芳子『歌集あしあと第二集』((山口県)、2004年)・古賀ウタ子『母の歩いた道』(潮出版、1990年)・三江幸子『歌集水を聴く』(青潮短歌会、1989年)・重田一枝他『霧笛 5人の隨筆集』(条例出版、1979年)・霜月一生『経営参謀 村田清風』(叢文社、1989年)・竹内慧香『歌集有時』(燈影舎、1975年)・多声俳句会『多声合同句集交唱』(多声発行所、1993年)・田中芳太郎『来月帖』((山口県)、1900年)・長尾健彦『歌ごよみ』(長尾八幡宮、2000年)・中嶋悟風『句集清水』((山口県)、1973年)・長門市教育委員会『長門の近松』(長門市教育委員会、1995年)ほか全65点(以上、伊藤忠芳様より寄贈。)

瓜生敏一『思い出す人びと』((愛知県)、1987年)(以上、吉田紗美子様より寄贈。)

## 平成20年度 山口県立大学公開講座 やまぐちの文学

会場：岩国市由宇文化会館 時間：13:30～15:00

※資料代 1000円

5.31 (土)	宇野千代の世界—女性の生き方—	中原中也記念館館長	福田百合子
6.7 (土)	中本たか子の初期創作について —『創作月刊』時代を中心に—	当センター研究員	加藤禎行
6.14 (土)	俳人種田山頭火と岩国	山頭火ふるさと会副会長	田村悌夫
6.21 (土)	上田堂山と『延齡松詩歌集』の世界	当センター研究員	野口義廣
6.28 (土)	鷺流狂言の世界	当センター所長	稻田秀雄

編集後記 ▼去る3月、郷土文学資料センター研究員である武市眞弘先生が定年を迎えられ退職されたことを記念して、巻頭に当センターにまつわる思い出や逸話を寄せいただきました。先生には設立当初からセンター研究員としてご尽力いただいたのみならず、このセンターだよりの編集を創刊以来長きにわたって務めていただきました。心より感謝申し上げます。▼武市先生とともに当センターの歴史を歩んできた野口・安光両研究員に先生との思い出を綴っていただきました。▼この春は山口の郷土文学関係のトピックスが豊富であったことを受けページ数を増やしております。中でも特筆すべき大きなニュースとして、山口県立山口図書館内に「ふるさと山口文学ギャラリー」が開設されました。先頃オープニングセレモニーが催されたことを機に、県立図書館の林史子氏にギャラリーのご紹介をお願いいたしました。当センターも資料の提供はもちろん、研究員全員が一丸となって協力させていただきたく思っております。▼3月20日・春分の日に、本学講堂で鷺流狂言の公演が催されました。この春に大学院を修了し、演者として将来が期待される米本太郎氏に石川弥一先生のことを中心に公演当日の模様を交え原稿をお寄せいただきました。当日はご本人も熱演、会場は大いに沸きました。▼いつもたくさんの資料を御寄贈いただきまことにありがとうございます。全て適切に保管・整理するとともにデータベース化しております。今回も多くの御寄贈を賜り心より感謝申し上げます。にもかかわらず、スペースの関係で一部の書名を割愛せざるをえませんでした。また定期刊行物は次号にまとめて掲載させていただきたく思います。心よりお詫び申し上げます。▼今号より武市先生の後を継いで編集を担当することになりました。誌面の質を落とさないことはもちろん、紙質や印刷におけるレベルアップも徐々にはかっていきたいと考えております。▼当センターへのご意見・お気付き等、ございましたらお寄せ下さい。(K)

■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター(〒753-8502 山口市桜島3-2-1)

TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251

■発行日：2008(平成20)年5月26日